



Angel's Voice

「礼拝と音楽」

司祭 パウロ 瀬山 公一

ヨハネ福音書は「初めに言があった」という言葉から始まります。絶対的な神の「ことば」として、他と区別するために「言葉」ではなく、漢字一文字で「言」と翻訳してあります。この言が肉体を取って人となり、主イエス・キリストがお生まれになったのです。不完全な人間の言葉ではなく、完全な神の言としてのキリストによって、わたしたちは救いを与えられるのです。

十戒に「いかなる像も造ってはならない」「主の名をみだりに唱えてはならない」とあります。何でも形や言葉にすると、その程度のものになってしまう。理解するために、小さな枠に収めてしまいたいという思いがそうさせるのですが、言葉にできない想いを伝えるのに、言葉だけでは十分ではありません。言葉は考えていること、そのものを現すというよりも、指し示しているだけなのです。答えではなく、ヒントを出しているにすぎません。上手に整えば、うまいことを言えるでしょうが、多くの場合この文章のように難問を解くこととなります。

人の行動の中に、自然とにじみ出てくる思いがあります。優しさや喜び、憎しみや悲しみ、嘘や罪悪感など、何も言わなくても感じることもあります。長年連れ添った夫婦であれば「愛してる」などと言う事の方が、白々しく感じます。言葉にしてしまったら、薄っぺらなものになるような気がします。

聖書を読んで、理論的に考えるだけでは、すべては理解できません。感情的に感じ取ることも必要です。祈りもそうです。美しい言葉よりも、思いのこもった言葉の方が感動的です。聖歌にもいろいろあります。愛唱聖歌や新しい難解な聖歌、喜びに溢れた聖歌や、神への感謝賛美の聖歌、どんな曲でも願いを込めて歌うことこそ重要なのです。一同が共に

心を合わせて礼拝で歌う聖歌は、神への祈りです。そして言葉だけでなく、音楽を通して神を感じる事ができるでしょう。

最近では、高性能な映像技術や音響装置が開発され、実際にその場にいるような臨場感を感じることができます。礼拝も説教も、教会に行かなくても仮想現実の中で行うことができます。平面的に印刷されたものを読むことや、映像や音を見聞きすることも、ある意味簡単なバーチャルリアリティです。神は教会だけにしかおられないわけではありません。教会に来ることができない人々のため、宣教のため、改めて確認するためにそれらは利用されています。

しかしそれは本物ではありません。どんなに技術が進んでも、仮想で聖餐に与ることは出来ません。CDで聞く音楽とライブで聞く生の音楽では、全く違います。教会の礼拝でパイプオルガンの奏楽に合わせて聖歌を歌うことの感動は、その場にいなければ味わうことはできません。そして礼拝は映画やコンサートのように、見に行くものではありません。参加するのであって、共に祈り、歌い、献げるものです。キリストが共におられることを感じ、そしてそこに自分も関わっていくことができるのは、参加しているからです。ただ臨場感を味わうだけでなく、そこに自分も存在していることを感じる事が、参加する意義なのです。

わたしたちは、神から多くの恵みを頂きます。その恵みを一緒に頂いた人々と共に喜び、感謝し、分かち合うことこそ教会の礼拝なのです。受けたものを、今度は人々に与えることが、幸いなのです。それは神の愛の働きに、わたしたちが参加することなのであります。

(神戸聖ミカエル教会牧師&パイプオルガン委員会委員)

「音楽の喜び」

～クワイアーフェスティバルを終えて～

神戸教区オルガニスト

ミリアム 伊藤 純子

1月29日(日)14時～18時、神戸教区聖ミカエル大聖堂にて、神戸教区参事会・オルガン委員会主催により、クワイアーフェスティバルが開催されました。講師として、立教学院教会音楽ディレクターのスコット・ショウ先生をお迎えしました。

まずはじめに、聖公会の夕の礼拝の構造と、そのような流れに至った歴史について、わかりやすく解説された後、参加者全員でウォーミングアップを行いました。ストレッチと呼吸法から始まり、身体がパイプのような筒になったつもりでアクビをしましょう、との掛け声で、喉でなくお腹で歌う感覚の指導がありました。

そして、「この聖堂のドアを開けたら、今まで体験してきたことやいつもの自分のスタイルを全部捨ててください」とのショウ先生の言葉で、歌の練習が始まりました。実際に当日17時から皆で献げる「音楽による夕の礼拝」の準備として、たくさんのチャントを次から次へと、皆で練習しました。



ショウ先生のご指導は非常にわかりやすく、興味深いものでした。

例えば、全員祭壇を向いて立っていたところ、ある程度できた段階で中央を向いて、互いに向き合う形で歌ってみることにし、お互いの声の響きがダイレクトに交わる音の拡がりを体験したり、今歌っているチャントのテキストについての的確な説明も面白く、歌詞の内容によってソプラノだけ、男声だけ、そして内容に合った、内容を伝える表現方法としての歌い方が指示されました。



チャントにおいて最も大切である歌詞を伝えるために、一音節に対し一音を配する、明確な歌い方が必要で、つい流されて早くなったり遅くなったりしてしまうことを注意されました。また、このように歌詞を明確に表すためには、オルガン伴奏にも工夫が必要とのことで、色々と試してみました。

この日の参加者は老若男女110名。昨年秋から課題曲をそれぞれの場で練習してきました。聖ミカエル教会や大阪川口基督教会、大阪アンデレ教会をはじめたくさんの教会から聖歌隊や一般信徒の皆様、聖公会関係学校として、桃山学院大学聖歌隊、松蔭女子学院高等学校合唱部、神戸国際大学聖歌隊も集い、聖ミカエル大聖堂にて初顔合わせの大人数での、たくさんの歌の準備。

タイトなスケジュールの中にも、笑い声が飛び交う和やかな雰囲気、初めの緊張はすぐにほぐれ、ぎこちなかった歌声は急速に慣れて、見事にまとまってきました。

この、ある意味「実験的」な試みは、「実際の夕の礼拝」として献げることにより、「実験」の枠を超えた、生きたものとなりました。また、諸教会の現状などにより日頃はなかなか思い切ったことができず、「実験的」な試みとしてしか試みることの難しい数々の方法を、思い切って皆で行ってみた結果、「礼拝における生きた音楽の体験」を、参加者全員で体感することができました。

まさに、音楽の喜びです！終了後の参加者のそれぞれの背中には、「やっぱり礼拝における音楽の力を信じて歩いていこう！」という、大きな大きな太鼓判が押されていたように感じました。

ショウ先生の指導は、数々の名言に彩られています。特に印象に残ったことは、「教会での歌い方と自分の音楽的理想が合わないときは、焦らずに諦めずに、2%ずつ進めていくほうがうまくいく。」「チャントを歌うときまた伴奏するときが一番大切なことは、聴くこと。」この会を終えて改めて、「聴くこと」こそ、礼拝音楽のキーワードであると感じました。

日常でも演奏でも、耳を傾けることから多くのことを学びます。空間に、そして神に、聴いていくことにより、空間と交流すること。見えない力との確かな交流こそが、音楽のもつ底力であると確信しました。

これらのことは実際に体験しないとわからないことであり、その場に集わないと、できないことです。音楽の力は、理屈ではなく、自らがまず原体験として味わうことがスタートだと思いました。

それを自分の宝物として鍵をつけてしまっておかずに、実際に実践し、原体験をもとに自分なりに工夫と応用を凝らして努力する。あの手この手を使って、目の前の現状に相応しい形を模索することの必要性と、有効性を、痛感しました。

ショウ先生はこの企画の趣旨を、一年以上前から、たぶん私以上に強く理解してくださり、お忙しい中、企画の実現に向けて根気強く、共に歩んでくださいました。結果は期待を大幅に上回るものでした。

私たちの求めまた思うところを遥かに越えて叶えてくださった神様に感謝して、与えられた場で肅々と、耳を傾け続けていきたいと決意を新たにいたしました。

ショウ先生、参加してくださった皆様、ありがとうございました。



プロフィール:スコット・ショウ

アメリカ、シアトルのワシントン大学においてオルガンとハーブシコードを学ぶ。ロチェスター大学イーストマン音楽院にてオルガン、合唱指揮法、音楽史を学び修士号、演奏博士号を取得。1989年から2002年まで長崎活水女子大学音楽学部教授、同大学及び短期大学チャペルオルガニストを勤める。アメリカ、イギリス及び日本国内各地でオルガンリサイタルを行う。指揮者としては、特に英国国教会音楽の聖歌隊宗教音楽を専門とする。16世紀から21世紀に至る作品を立教大学聖歌隊の活動を通して研究、演奏する。さらに様々なレクイエム、ミサ曲を含む合唱とオーケストラのための作品を指揮する。又、日本国内の教会音楽家達の働きにも関心を示し、立教大学教会音楽研究所や日本聖公会の活動において積極的に取り組んでいる。現在、立教学院教会音楽ディレクター、諸聖徒礼拝堂聖歌隊隊長、立教大学文学部キリスト教学科教授。立教大学教会音楽研究所所長。

<レッスン報告>

★教区レッスン

2016年10月休み、11月(4人)、12月(4人)
2017年1月(5人)、2月(3人)、3月(4人)

★教区内信徒レッスン受講者募集中

課題は、聖歌集より自由選択。伊藤純子氏の指導の元、パイプオルガンの響きを体験し、奏楽の課題を解決するためのヒントを得ませんか？単発受講も可能です。月1回日曜日。13:30～15:30。5月は28日の予定。お問い合わせは、教区事務所まで。



★松蔭中・高校オルガンレッスン
2017年1月(4人)、2月(4人)、
指導:坂倉 朗子氏(松蔭中高校オルガニスト)

★聖ミカエル教会信徒のレッスン
月に1回 現在、延べ10人が受講中

<礼拝、行事報告>

★クワイアー・フェスティバル開催

1月29日(日)14:00~18:00

講師:スコット・ショウ氏

礼拝司式:中村 豊主教

オルガン:伊藤 純子氏

★聖職按手式、中村 豊主教感謝礼拝

3月25日(土)10:30~12:30

坪井 智執事、浪花 朋久両執事が司祭に、
遠藤 洋介聖職候補生が執事に按手された。

オルガン:伊藤 純子氏

指揮・指導:喜多 ゆり氏、

奉唱:大聖堂聖歌隊

★日英交流コンサート

日英音楽協会創立25周年記念日本公演

4月16日(日)15:00~16:30

指揮:ジョナサン・グレゴリー氏

合唱:日英音楽協会合唱団

テノール:ジュリアン・グレゴリー氏

オルガン:ジョナサン・グレゴリー氏

トム・エサルリッジ氏

イースターにちなんだ聖歌や英国のアンセムを中心に演奏され、約120人が楽しんだ。



テノール:ジュリアン・グレゴリー氏

【編集後記】

「洗練された礼拝」パイプオルガン設置の舵取りをされ、3月で退任された中村豊主教がオルガニスト研修会の挨拶で、また折に触れて口にされた言葉である。

言うまでもなく司式者、サーバーや奏楽者だけで礼拝を捧げているのではない。

会衆一人ひとりの気持ち、祈る声や歌の力が結実して礼拝を構築する。奏者の力量だけでなく、会衆の歌う力、礼拝に沿った聖歌と相応しい奏楽曲、等々、そのどれもが「洗練された礼拝」に関ってくると思う。

とは言っても、音楽の占める割合の多い礼拝で、音楽が苦手な人の心をもまとめ、全体を導く役割を負う奏楽者や聖歌隊員の責任は重く、良くも悪くも影響は大きい。

失敗に落ち込み、多くの反省の日々を経ながらも「主はわが飼い主、われは羊」(聖歌461)と歌い続けたい。聖歌に励まされながら、日々心新たにキリスト者となり、主に仕える礼拝音楽奉仕者になれますように。



パイプオルガン会報紙事務局 (神戸教区事務所)

〒650-0011

神戸市中央区下山手通5丁目11番1号